

令和7年度 研究紀要 第247号

《 研究主題 》

一人一人の子供を主語にする 授業づくり ～2年次～

- (1) 「一人一人の子供を主語にする授業」の具体的な実践例
- (2) 子供の学びを支えるために、私たちができること



胆振教育研究所



授業の主語を、子供へ

胆振教育研究所 所長 佐藤 淳

「一人一人の子供を主語にする授業」を進めるにあたり、「単元をどのように構想すればよいのか」「異なる方法で学ぶ子供たちの姿を、どのように見取ればよいのか」「主体的な学びが、単なる自習に終わってしまわないか」など、さまざまな疑問や不安を抱えている先生方も多いのではないのでしょうか。

そうした問いに応えるべく、本研究所では昨年度より「一人一人の子供を主語にする授業づくり」を研究主題に掲げ、理論研究を進めてきました。子供を主語にする授業が求められる背景を整理するとともに、子供が自ら学びを進めるための具体的な授業方法について検討し、その成果を発信してきました。また、夏季研修講座では、複線型の授業や学びのユニバーサルデザインを取り上げ、実践的な研修を実施しました。

私たちは、これまで「教師が何を、どのように教えるか」という視点から授業改善を積み重ねてきました。しかし今、改めて問い直したいのは、「子供がどう学び、どう変容したのか」という視点です。授業の主語を子供に置くとは、ただ活動を子供に委ねることではありません。子供の思考の過程や選択、つまずきや気づきに目を向け、それらを起点として授業を構想することです。

その具体的な手立てとして、自由進度学習や授業の複線化があります。到達目標を明確に共有したうえで、学習の進め方や課題の難易度、表現方法に選択の幅をもたせることで、一人一人が自らの力に応じて学びを進められるようにします。さらに、一人一台端末を活用して思考の過程を可視化し、学びを記録・共有することで、個別最適な学びと協働的な学びを結び付けていきます。

しかし、こうした実践を進めることは簡単ではありません。学習進度の差への対応、評価の在り方、時間的制約、さらには教師の負担感など、現場には多くの課題が存在します。だからこそ本紀要では、研究所員による具体的な実践を取り上げ、その工夫や成果だけでなく、直面した課題についても率直に示しました。理論にとどまらず、現場の試行錯誤を共有することこそが、次の実践への確かな一歩につながると考えたからです。

まとめとなる次年度は、所員の実践だけでなく、管内各校の取組を広く集約していきます。先生方一人一人の挑戦をつなぎ、学び合い、管内のみならず全道へと発信することで、胆振の教育の歩みをさらに高みへと進めていきたいと願っています。

もくじ

巻頭言 「授業の主語を、子供へ」

胆振教育研究所長 佐藤 淳

I 研究の構想

- | | | |
|---|-----------|---|
| 1 | 研究主題 | 1 |
| 2 | 研究主題設定の理由 | 1 |
| 3 | 研究内容 | 2 |
| 4 | 研究の全体構造 | 2 |

II 研究内容

- | | | |
|---|------------------------------|----|
| 1 | 「一人一人の子供を主語にする授業」の具体的な実践例 | |
| | (1) 「授業の複線化」を追究する同一中学校区の取組 | 3 |
| | (2) 宇南山教諭・尾野教諭との対談内容 (Q&A形式) | 4 |
| 2 | 「子供の学びを支えるために、私たちができること」 | |
| | — 所員所属校での実践を通して — | |
| | (1) 「一人一人の子供を主語にした授業」の実践から | 12 |
| | ・伊達市立伊達中学校の実践 | |
| | ・登別市立登別中学校の実践 | |
| | ・伊達市立伊達小学校の実践 | |
| | ・伊達市立東小学校の実践 | |
| | (2) 人・場・ツールが支える学び | 21 |

III 今後の方向性

- | | |
|---------------|----|
| ○今年度の研究を振り返って | 23 |
| ○参考資料、研究・執筆 | 24 |
| ○あとがき | 25 |

I 研究の構想

1 研究主題

一人一人の子供を主語にする授業づくり

2 研究主題設定の理由

(1) 教育改革の動向より

Society5.0時代の到来、加速度を増す社会の変化など、複雑で予測困難な時代を迎えています。急激に変化する時代の中で、一人一人の子供が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々が協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となるための資質・能力を育成することが、我が国の学校教育に求められています。

子供に必要な資質・能力を着実に育成するためには、学習指導要領にある「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改革が不可欠です。令和3年1月中央教育審議会答申『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して』では、ICTを活用しながら、個に応じた指導を学習者視点から整理した概念である「個別最適な学び」と、「協働的な学び」の一体的な充実が、「主体的・対話的で深い学び」の実現につながると述べられています。

そのためには、私たち教員も意識を変革し、従前の「教師主導」「一斉指導」から「子供たちが学習の主体者」となる授業への転換を図ることが大切です。全ての子供たちの可能性を引き出す、「一人一人の子供を主語にする」授業づくりの推進が、今求められています。

(2) 研究所の研究から

令和3～5年度の本研究所の理論研究「個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けた授業づくり」から、次のような課題が見えてきました。

- 今後も個別最適な学びと協働的な学びの実現を目指した授業づくりに向けて、胆振管内の共通理解を図るため、随時情報発信をしていく必要がある。
- 「教師が教える授業」から「児童生徒が自ら学ぶ授業」への転換を目指し、教師の意識の変革を呼びかけていく必要がある。

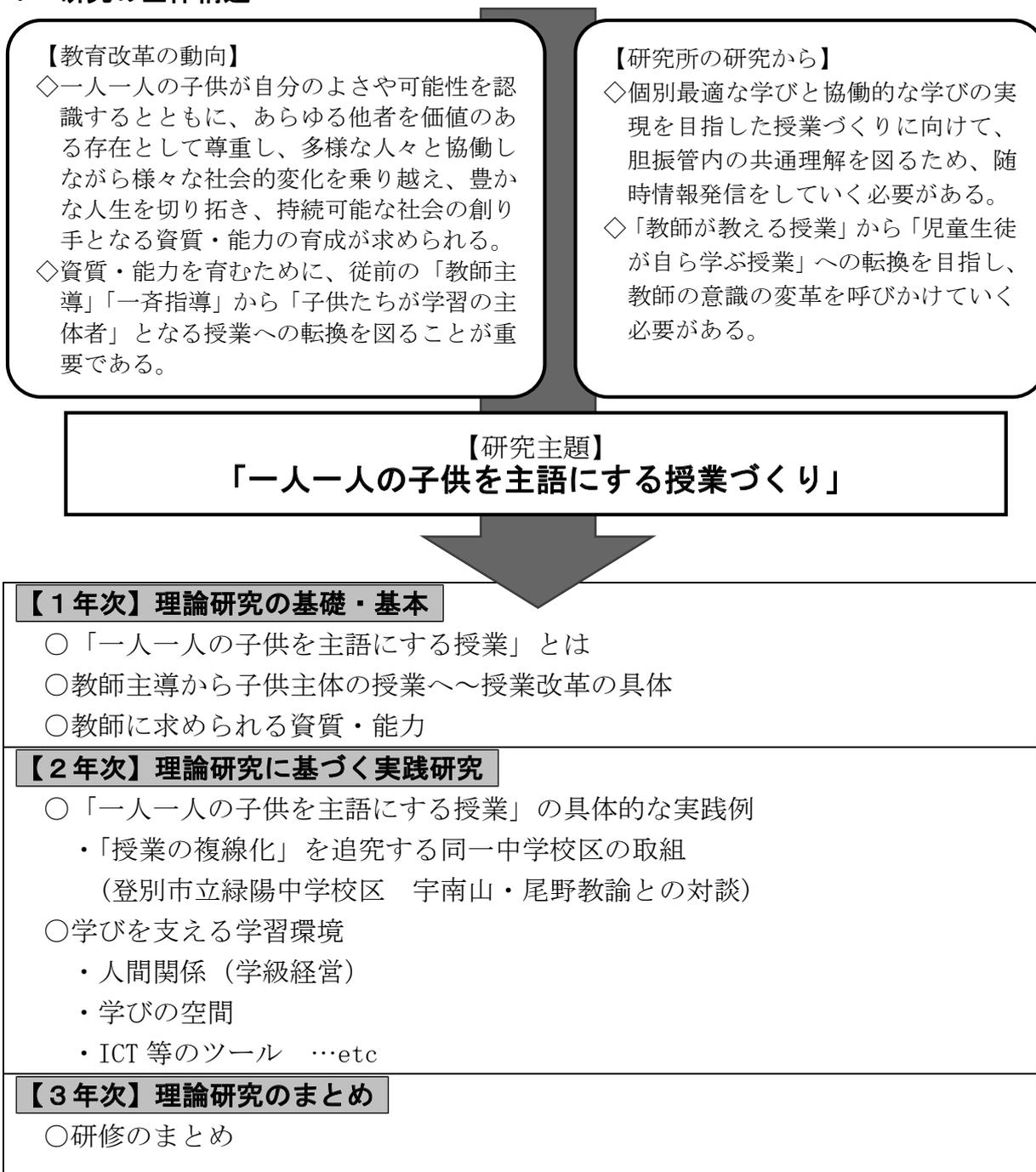
現行学習指導要領が施行され、学習の主体を子供とする授業づくりについての理解は進んできているものの、実践については苦心している学校・先生が依然として多いように感じます。

胆振管内全ての学校において、一人一人の子供を主語にする授業の実現を目指し、先進的な実践や各学校での具体的な取組を交え、研究を深めていくことが大切だと考えます。

3 研究内容

- (1) 一人一人の子供を主語にする授業づくりとは
- (2) 一人一人の子供を主語にする授業の具体
- (3) 一人一人の子供を主語にする授業の実現を目指して

4 研究の全体構造



Ⅱ 研究内容

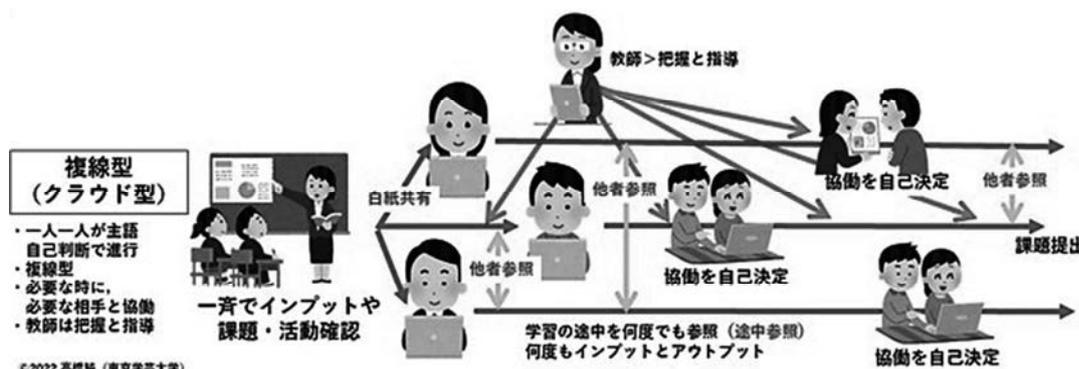
1 「一人一人の子供を主語にする授業」の具体的な実践例

(1)「授業の複線化」を追求する同一中学校区の取組

本研究所では、3年間を通して「一人一人の子供を主語にする授業」の探究を進めています。今年度は、その第2年次にあたり、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の調和を視野に置いた授業を具体化する実践の一環として、「授業の複線化」を取りあげフォーカスしていきます。

「授業の複線化」とは、子供が自分の学び方を選び、自らのペースや関心、理解の深まりに応じて複数の学習ルートを進むことを可能にする授業の構えです。例えば、課題に対して子供が「一人で考える」「友達と相談する」「先生と対話する」など、自分に合った学び方を選ぶことができます。

この考え方を理解する上で有効なのが、下の図です。単線型授業では全員が同じ進行で学ぶことを前提としますが、複線型授業は学びの多様な進行・選択を想定し、子供一人一人の実態に応じた学びが可能となるよう設計します。



※図～「GIGA スクール構想×クラウド活用」(文部科学省) (<https://www.mext.go.jp/studxstyle/special/49.html>) より

管内でも既に「一人一人の子供を主語にする授業」を目指して、現在各校で「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実の実現に向けた授業改善が行われています。「授業の複線化」の実践から得られるヒントや気づきが多く、大変意義のあるものと考えます。

今回は、同一中学校区の小学校と中学校それぞれで授業の複線化に取り組んでこられた、宇南山大輔先生（登別市立富岸小学校）と尾野成篤先生（登別市立緑陽中学校）との対談を紹介します。小学校から中学校へと学びがどのように連続・発展していくのか、校種をまたいで考えることは、今後の授業改善やカリキュラム・マネジメントにとっても非常に重要であると考えられます。

ここからは、2名の先生との対談を通して、「複線化」の考え方の背景、具体的な実践の工夫、そしてそこに込められた思いを紐解いていきます。この対談を通して、子供を主語にした授業のイメージをより具体的に描いていただければ幸いです。

(2)宇南山教諭・尾野教諭との対談内容(Q & A 形式・敬称略)

テーマ:「授業の複線化」の実践とこれからへの展望



Q1: 授業の複線化を通して、先生方が子供たちにどんな姿を目指してきたかを教えてください。

尾野: 今目指しているのは、大人になった時に、様々な変化に対応できるような人になってほしいという点です。教科的な部分よりは、人としてどう成長していくかというところを念頭に置きながら授業をするようになりました。数学科なので、以前は高校受験も考え教科的な指導ばかりを重視していましたが、今は授業を通して世の中に出た時にどういう人間であってほしいかという人としての部分を大切にしています。

宇南山: 社会に出てから生涯学び続けられる人間の育成を目指し、小学校段階ではその土台作りを担いたいと思っています。

「令和の日本型学校教育」が目指す、生涯にわたって学び続けられる、学び方を知っている子供の育成を授業の中で意識しています。

Q2: 具体的に、授業を変えたいと思われたきっかけや背景はどんなことでしたか？

宇南山: 一番大きなきっかけは、やはり久喜市への道外視察です。その前から社会科などでは自由進度学習を取り入れていたのですが、教師が教える従来の授業では「子供たちに本当に身に付けさせた力が身に付いているのか」という違和感がありました。例えば、社会科で資料から読み取る力が身に付いていないと感じ、自分たちで調べるためにはどのような環境作りが必要かを考えたところから、今の学習スタイルに変わりました。

尾野: 僕もコロナ禍になりタブレットが導入された時、校務DXなどにはもともと取り組んでいました。授業でどう活用していくか、どんな形の授業が良いかを考えていた時に、宇南山先生と同じように久喜市に行ったんです。そこで実際の事例をたくさん見て、「あ、こうやって、タブレットを目的ではなく、うまく道具として使っていくんだ」という授業のあり方を学んだのが、授業を変える大きなきっかけになりました。

Q3: このような先進的な取組を行う上で、うまくいかなかったことや悩んだことはありましたか？また、それを乗り越えるきっかけや工夫などがあればお聞かせください。

尾野: まず今もそうなのですが、正解は分かりません。それが一番の不安な部分です。ただ、久喜市に行かせてもらったり、いろんな方の講演を聞いたり、身近に宇南山先生の取組を見せてもらったりと、周りに「変えていこう」という人たちの生声があったので、自分もこの方向性は間違えてないんだと確認しながらやっています。子供たちは意外と柔軟で、我々が心配するほど何も考えてないわけではなく、僕たち以上に考えてやってくれるんですよね。当初は授業崩壊を心配しましたが、子供たちは自分のペースで学ぶようになると、すごく集中力を見せてくれます。子供たちを信じ、少しずつ委ねることで、主体的な学びに変えていけると感じています。

宇南山: 私の4月の大失敗として、スモールステップの設定が難しかったことです。特に「やらないは有り得ない」という子供たちとの共通認識を作るのに苦労しました。例えば、タブレットへの入力やチェックマークをつけるといった習慣がなかなか身に付かず、繰り返し行う必要がありました。これを乗り越える工夫としては、何のためにタブレットに入力するのか、チェックマークをつけるのかという、子供にメリットがある共通言語を作ることです。例えば、「先生が助けてくれる」「友達の意見がよく分かる」といったメリットを伝え、子供たちと同じ思いをもって伴走者として取り組むことを意識しました。

Q4: 子供たちが「問い・問題意識」をもって学んでいくための手立てについて、先生方が有効だと感じたもの、または学習の方向がずれていった時の対応について教えてください。

宇南山: 問いをもって学ぶための手立ては2つあります。1つ目は、子供たちに実際社会の事象を用意することです。「今の社会はこうだね、こんな風になっているんだけどどうしてだろうね?」というように、教科書以外の実社会の事例も使って問いをもたせる仕掛けをしています。2つ目は、問いを立てる時の言葉を10個ほど用意し、「どのように、どのような、なぜ」といった問いとして使える言葉を例示しています。方向性がずれた場合は、まず問いを集約し、クラスで出た問いを幾つかにまとめるなどして、そこから子供たちに選ばせる形をとっています。これは、問いがどういうものか、何が課題に即した問いなのかを練習するためでもあります。

尾野: 中学校は高校受験があるので、小学校よりも複線型の授業は敬遠されがちです。ですから、僕の授業では基本ベースは教科書の学習内容に沿い、受験にも向き合える形にしています。デジタル教科書を活用しながら、スライドを用意し、学びのガイド、つまり方向付けは必ずしています。子供に「ゼロから任せた、好きにやっていいよ」とやると方向は絶対にずれてしまうので、スライドに沿って進めます。ただし、学力は人それぞれ違うので、ゆっくりやる子もいれば、友達に聞いてもいいし、YouTubeなど参考になるリンクも用意したり、友達と交流する場面を自由にさせています。「ただの自習にならないように」と、「自習じゃないんだよ」ということは日頃から伝えています。

Q5: 学びの方法・内容・ペースなど、何を子供たちに選ばせるかという場面をどのように設けていますか？また、任せたことでうまくいかなかったことはありますか？

尾野: 今年初めて1年生を担当し、複線の授業に慣れていない子もいました。最初は落ち着かない状態だったので、いきなり何でもかんでもフリーにすると授業崩壊するだろうと考え、まずは協働的な学びよりも個別最適な学びの方を重要視し、自分のペースでできる内容に取り組むことを重視しました。去年のように3年生で持ち上りの学年であれば信頼関係があるので最初から立ち歩きや教え合いを許可していましたが、1年生の1学期は、好き勝手におしゃべりするなど間違った方向に行く可能性も考え、あえて従来の自分の席で落ち着いて、というところを念頭に置きました。やる時期や子供たちの成長の度合い、環境によってやり方を変える必要があります、必ずしも全ての時間を完全に複線化させる必要はないと認識しています。

宇南山: 段階としては、まず「学習方法の複線化」から図りました。例えば、最後のまとめを紙でやるかデジタルで作るかを子供たちに選択させました。その次に、「学習対象の複線化」です。大きな学習課題は同じでも、一人一人の問いが違い形、例えば「縄文時代の武器についてやるよ」「食べ物についてやるよ」といった形で進めました。そして3学期には「学習課題の複線化」を図りたいと思っています。任せる中で苦労した部分は、やはり「複線化＝任せること」が念頭にあったものの、「任せる」というのは結果論でしかないということです。教師主体では個別最適な学びは難しく、その結果として子供に任せていく、学習のコントローラーを握

らせていくことが重要だと感じています。うまくいかなかったこととしては、やはり子供たちが学習にならず、作業になってしまうことです。学び方を知らない子供たちにいきなり任せても、遊びになってしまうので、そもそもの学び方、学習方法という部分をまずは定着させることが、学校全体で段階的に取り組むべき課題だと感じています。

Q6: 子供たちの「振り返り」について、具体的な方法と、それが授業改善にどのように活かされているか教えてください。

宇南山: 振り返りは毎時間やるようにしています。子供たちには「何が分かったか」を自分の言葉で書くことを重視しています。また、分かったことだけでなく、何が分からなかったか、何がうまくいかなかったかまで振り返らせることで、キーワードである「メタ認知」を育成していかなければならないと感じています。子供たちには「反省はする必要はないよ」と伝えています。自分が得意なこと、うまくいったことも含めて「自分を知る」ことを振り返りで意識させています。授業改善については、振り返りを評価の一部にも取り入れています。書くことが難しい子もいるので、自己評価を数値化させることもやらせました。例えば、授業の満足度を点数でつけさせたり、ABC評価(ルーブリック)を取り入れています。1時間目には必ず全員Cからスタートにしており、そこから「こういう手引きなんだけどどうだい？」と返し、できることやできないことを自覚させるようにしています。

尾野: 私はスプレッドシートで毎時間5分から10分、授業の終わりに振り返りを入力させています。これもメタ認知的な部分で、「自分は何ができて何ができてい

ないのか」を自覚させるためです。また、今の中学生は言語化する力が弱いと感じているので、数学的な内容を数学の用語を使って表現し、アウトプットする場としています。インプットよりもアウトプットする時間を大事にしています。特に重要視しているのは、「質より量」です。たくさん打ち込ませることで、自分がこの1時間でどんなことができ、どんなことができていないかをアウトプットし、自分のものとしていく繰り返しです。他の人の考えを参考に書かせたり、数学的な表現を書かせたり、今日の学び方自体がどうだったかなど、いろんな角度からの振り返りを大事にしています。また、他者参照ができるよう、学年全員がGoogleサイトを活用し、いつでもどのタイミングでも振り返りを共有できるようにしています。他の子の振り返りを見て参考にできるようにしたり、コメントを残したりもしています。これにより、タイピング能力や情報活用能力の育成にもつながっています。

Q7: 学校全体として、この実践の成果や気持ち、共有について教えてください。

尾野: 正直難しさを感じているのは確かなのですが、複線化よりもまず、うちの学校として進めているのは校務DXです。校務DXを進める中で、タブレットの効果的な部分や機能が授業に活かせることに気が付きました。年配の先生方もICT活用を敬遠しがちでしたが、若い先生方が使っていることもあり、お互いに声を掛け合いサポートし合う中で、校務DXがすごく進んできたという実感があります。これを次に授業に活かしていこうというステップアップにつながっています。教科の中では、私自身が数学を教えています、

他の数学の先生に授業を見てもらったり、他の教科でも英語科や社会科などが、「一部子供に委ねる時間を作ってみませんか」「クラウド活用してみませんか」といった形で少しずつ前に進もうとしています。久喜市の教授の話で、「一步一步、歩みを一緒にすることは難しい。だけど、方向性を同じくしていくことであれば、そんなにハードルは高くない」という話を聞き、確かにそうだと感じました。うちの学校では先生方と同じ方向を向いてできているという感覚があります。

宇南山: 荒療治的ではあったのですが、とにかく子供と同じツールを先生方も使うことからスタートしました。一昨年導入した際は抵抗感があった先生もいらっしやいましたが、今では自分たちの方から「これ使ってみたいんだけど」と声をもらい、使う意識がすごく高まっています。尾野先生の話にもあったように、「足並みを揃えるのではなく、方向性を揃える」非同期的な研修のあり方も取り入れられており、先生方も個別最適な学びをしている意識があります。今年度は中間報告会を行い、それぞれが実践したこと、失敗したことを先生方も一人一人が発表する場を設けました。これも子供たちの学びと相似形で、一人一人が学びを表現していくことが本校の研修テーマにもなっています。共通しているのは、子供たちの学びと教師の学びは相似形であるということです。



Q8: 小中学校の連携について、学習の複線化やDXといった取組はどのようにつながっていけば良いのでしょうか？

尾野: 今年、1年生を教えていて、宇南山先生の学級から上がってきた子たちを見て、やはり小学校段階での土台がすごく大事だと感じました。土台なしに始めようとしても、うまくいきません。子供たちはこっちがさせたい意図を汲み取ってくれますし、他の学校から来た子たちも、そのやり方を真似して、うまく融合しています。小学校の段階で学び方を学んでいる子たちや、タイピング能力などの情報活用能力の土台があることに、とても重要性を感じています。小学校でせっかく土台があるのに、中学校でまた従来型の授業をしてしまうと、その子たちが報われないと感じる部分もあります。小中学校で同じ方向を向き始めていると思いますが、もっと深くつながりをもってやっていけたら良いと思います。



Q9: この実践を通して、先生方ご自身の「教師としての役割」や「授業観」にどのような変化がありましたか？

宇南山: 私の中で授業観が大きく変化しました。教師が教える、知識の伝達者としての立場だったのが、今ではやはり「伴走者」であると感じています。子供たちも「授業とはこういうものだ」と思ってい

る部分があり、そこをお互いに打ち崩していかなければなりません。「学びは与えられるもの」ではなく「自分から学んでいくもの」であり、子供たち自身が主役であるという部分は、子供たちにも先生方にも伝えていかなければならないと思っています。教師は「教える人」と書きますが、この言葉も今後少しずつ変わっていくのかな、と。「サポーターの人」と呼んでいる学校もあるように、「伴走者」という言葉が今一番しっくりきています。

尾野: 教科の中身を教えることも当然ありますが、それよりもやはり「学び方を学ばせる」ことを重視しています。その中でよく言うのが、「じりつ」（自律と自立）です。自分の目標を設定し、自己調整しながら自分を成長させていく「自律」と、将来的には社会人になり、周りに支えてくれる人がいなくなる中で、その都度最善の選択ができるような「自立」です。学校は小さな社会だと思います。その小さな社会の中で、実社会に向けてどう自分が成長していけるかを支えていく立場になっていると感じています。情報が溢れる中で、正しい情報を選択したり、自分にとって良い生き方、ウェルビーイングといった方向に、子供も我々もシフトしたりしていかなければなりません。だから、子供たちと一緒に学んでいかなければならないと感じています。



Q10: これから本格的にこのような実践を始めようと思う先生方へ、メッセージをお願いします。

尾野: 冒頭でも言いましたが、間違いないと思うのは、僕自身、色んな人の授業を見たり、様々な方々とうちやあって喋ったりと、交流する機会をもつことの重要性を改めて感じました。久喜市や信州大学の佐藤和紀准教授の話や聞くなど、新しいチャレンジをしている人たちの授業や話を聞くと、すごく刺激になります。これが正解か不正解かはまだ分かりませんが、「やってみただけで失敗した」という経験でも良いと思います。ぜひ僕自身も交流させていただきたいですし、お互いにこれが正解、これが不正解とすぐに棲み分けをするのではなく、最終的に子供たちにとって良い学びを、という方向はどの先生方も同じだと思いますので、手を取り合って、より良い授業の形を模索していけたら良いなと思います。

宇南山: 子供たちがこれから生きていく社会、いわゆる VUCA の社会に対応できる子供を育てていく中で、大人が「我々は変わりません」ではダメだと思います。子供たちが変化の激しい社会に生きていくのであれば、大人もそうしなければなりません。社会の変化に敏感になっていくことが、「社会に開かれた教育課程」にもつながると思います。私もどちらかというと「方法から入った」人間です。「こうやればいいんだ」「スプレッドシートで他者参照させればいいんだ」というところから入って、その良さ、本質は何だろうと考えてきました。これも一つのやり方だと思います。ただ、やってみないと批判もできませんし、建設的な議論もできないままなので、まず何か取り組んでみる、何か一歩やってみるところから、子供たちに委ねる場面を設けることができると思います。

本対談で語られた両名の先生は、変化の大きい社会に対応し、自ら学び続ける力を育むことを何より大切にされています。これは、中央教育審議会答申（令和3年1月）が示す「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実、そして学び続ける力の育成という方向性とも重なります。

対談では、道外視察や GIGA 端末の導入をきっかけに、教師の役割が「知識を教える人」から「子供の学びに寄り添い、ともに考える伴走者」へと変わってきたことが語られました。子供が自ら問いを立て、振り返り、学び方や課題を選ぶための工夫を積み重ねることで、主体的な学びが教室の中心に据えられている様子が伝わってきます。

また、学校全体で ICT を活用しながら実践を共有し合い、互いに声を掛け合う中で、先生方の授業改善が着実に進んでいることもうかがえます。全員が同じ形を目指すのではなく、それぞれの実践を持ち寄って学び合う教職員集団の姿は、答申が示す「学校の質の向上」にも重なるものと言えるでしょう。

さらに、小学校で培われた学び方や情報活用の力が、中学校での探究的な学びや自立的な課題解決を支えているということも重要です。義務教育9年間を見通した学びの連続性が、子供たちの主体性や学び続ける力を育てていく土台になっていることがうかがえます。

子供とともに学び、教師自身も学び合いながら成長し続ける——その姿勢こそが、この対談全体を貫いている最も大切なメッセージなのだと感じました。

自己調整学習(複線型授業) 身につけてほしい2つの力

自律

自分で自分の目標を設定し、その目標を達成するために、自分で自分自身をコントロールする力
「自己調整力」
自分で自転車をコントロールするように

自立

助けてくれる人がそばにいなくなった後でも、自分の信じる最善の行動を自分で選択できる力
「ほめられるからやる」
「怒られるからやらない」からの脱却

単元のゴール 3章 方程式

【知識・技能】

- 方程式の必要性と意味及び方程式の中の文字や解の意味を理解すること。
- 簡単な方程式、比例式を解くこと。

【思考・判断・表現】

- 等式の性質をもとにして、方程式を解く方法を考察し表現すること。
- 方程式、比例式を具体的な場面で活用すること。

単元マップ① 3章 方程式

学習課題	学習課題
① 等式を成り立たせる文字の値について学びましょう。(1節-1)	① 方程式を利用して、いろいろな問題を解決しましょう。【導入】(2節-1)
② 等式の性質について学びましょう。(1節-1)	② 方程式を利用して、いろいろな問題を解決しましょう。【代金の問題】(2節-1)
③ 等式の性質を使って、方程式を解きましょう。(練習問題含む)(1節-1)	③ 方程式を利用して、いろいろな問題を解決しましょう。【過不足の問題】(2節-1)
④	④
⑤ 方程式を移項して解くことについて学びましょう。(1節-2)	⑤
⑥	⑥
⑦	⑦ 方程式を利用して、いろいろな問題を解決しましょう。【速さ・時間・道のりの問題】(2節-1)
⑧ いろいろな方程式の解き方について学びましょう。(1節-2)	⑧
⑨ 練習問題(1節-2)	⑨ 練習問題(2節-1)
⑩ 比と比例式の性質について学びましょう。(1節-3)	⑩ 比に着目して、いろいろな問題を解決しましょう。(2節-2)

資料2 尾野先生のスプレッドシート記入例

単元全体の個人目標		効率的に生徒する・時間配分を気にする		授業のはじめ		授業の終わり		文字数合計
学年	月 日 曜	単元の学習目標	本単元の学習目標	達成目標の達成率	振り返り	学びの振り返り	学びの振り返り	単元の振り返り
1	11	水	OOの性質を見つけて、説明しましょう。	S	OOの性質を見つけて、説明しましょう。	OOの性質を見つけて、説明しましょう。	OOの性質を見つけて、説明しましょう。	309
第1週	9	4	日	水	等式を成り立たせる文字の値について学びましょう。	等式を成り立たせる文字の値について学びましょう。	等式を成り立たせる文字の値について学びましょう。	411
第2週	9	5	日	水	等式の性質について学びましょう。	等式の性質について学びましょう。	等式の性質について学びましょう。	524
第3週	9	8	日	水	等式の性質を使って、方程式を解きましょう。(その1)	等式の性質を使って、方程式を解きましょう。(その1)	等式の性質を使って、方程式を解きましょう。(その1)	569
第4週	9	9	日	水	等式の性質を使って、方程式を解きましょう。(その2)	等式の性質を使って、方程式を解きましょう。(その2)	等式の性質を使って、方程式を解きましょう。(その2)	

① 1カ所に○をつけよう！

評価レベル	漢字の正確さ / 言葉の選び方 (清書を見て評価します)	目標	自己評価
A 十分に達成！	5年生までに習った漢字をすべて正しく使え、さらに、伝えたい内容にぴったりの言葉 (言葉をつなげて熟語を作ったりや漢字の訓を使ったりするなど) を効果的に選んで表現できた。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
B おおむね達成！	5年生までに習った漢字を間違いなく文章の中で正しく使うことができた。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
C もう一歩！	5年生までに習った漢字に間違いがいくつかあったり、文章の意味に合わない言葉 (語句) を使ってしまった。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

評価レベル	文章の工夫 / 伝わりやすさ (下書きを見て評価します)	目標	自己評価
A 十分に達成！	交流で得たアドバイスを活かし、比喻や体言止めなどの表現の効果を考えながら、文章により魅力的な工夫を加えることができた。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
B おおむね達成！	文章全体のまとまりや書き方 (文末や句読点など) に気を配り、読みやすく整った文章にすることができた。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
C もう一歩！	伝えたいことは書いたが、文章を読み直す (推敲) のが十分でなく、構成や表現が分かりにくい部分が残ってしまった。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

評価レベル	学習への取り組み / 振り返り (学びへの向かい方と振り返りシート見て評価します)	目標	自己評価
A 十分に達成！	CBTの結果や振り返りを活かして、自分の「学び方」をどうしたらよくなるかを学習の最初から最後まで考え、次の学習に生かそうとしている。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
B おおむね達成！	書き方を工夫しようと意欲をもち、設定した課題に沿って最後まで粘り強く取り組んだ。また、今日の学びを振り返ることができた。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
C もう一歩！	学習課題や目標に向かって粘り強く取り組む姿勢が見られなかったり、振り返りの内容が具体的でなく、次の学習に生かそうとする姿がわかりにくい。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

② 記述

A 読み手に、伝えたい様子や雰囲気がいっしょに伝わるようにするにはどのように書けばよいでしょう。

B 学び方の振り返り (CBTから課題提出まで、どのように学び、どんなことを次回に生かしたいですか?)

2 子供の学びを支えるために、私たちができること

— 所員所属校での実践を通して —

(1)「一人一人の子供を主語にする授業」の実践から

「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」という理念は、現在の教育改革の中心に位置付けられ、各地の学校でその具現化に向けた取組が進められています。一方で、こうした理念を日々の授業の中においてどのように具体化していくのかについては、まだ手探りの段階にある学校も少なくありません。

本研究所では、従来の授業観を見つめ直し、「一人一人の子供を主語にする授業」とはどうあるべきかを問い続けてきました。中でも、学習の複線化については、そのアプローチの一つとして注目しています。宇南山先生と尾野先生との対談を通して、予め定まった形式や一つの正解があるわけではなく、子供の姿に向き合いながら試行錯誤を重ねていく過程そのものが、授業を形作っていく上で重要であるということが見えてきました。その要素として「人（関係）」「場（環境）」「ツール」の3つを重視していると考えられます。

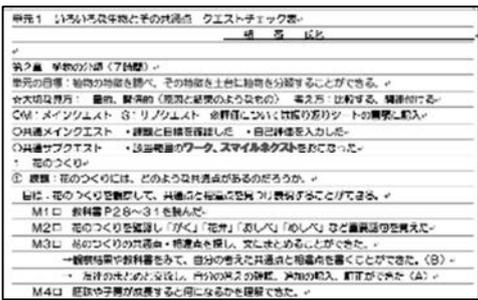
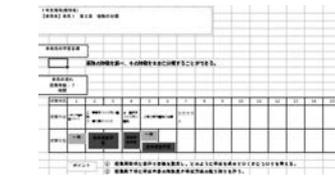
次のページからは、研究所員の所属する学校で行った「一人一人の子供を主語にする授業」の実践を紹介していきます。どの要素を起点として授業が構成されているのか、またそれらがどのように結び付いて働いているのかという視点から、この後の実践を読んでいただければと思います。それぞれの実践は、統一された型にはまるものではなく、各校がそれぞれの学校・学級の実態や日々の授業の積み重ねの中で構成されたものです。実践してみて初めて気付いたことや、子供の反応を通して改めて考えさせられたことなどに注目して記載しています。授業の構成や教材の工夫に加えて、子供同士や教師との関係、教室の学習環境、ICTや補助教材など、学びを支えているさまざまな条件が、実際の授業の中でどのように関わっていたのかにも、目を向けていただければと思います。

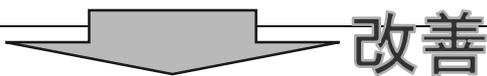
1 はじめに

中学1年生の理科 「1いろいろな生物とその共通点」 2章「植物の分類」の実践を3章「動物の分類」で改善した様子を以下にまとめました。「見通しをもつ」、授業や学び方を「振り返る」の2点に重点を置き授業を進めています。まだまだ、「これだ!」という授業実践は得られておらず、試行錯誤を続けている現状です。

2 実践の成果と課題

(1) 実践内容

手立て	指導の意図
<p>クエストチェック表</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・シラバスの役割をもつもの (単元全体の見通しをもたせる) ・To do リストとして何をするかを確認する (主体的に学ぶ、どんどん先取りすること、自分のペースと順序で進めることを考える)
<p>振り返りシート</p> 	<p>学びの振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習内容の振り返り (1時間でわかったこと、次への課題) ・学び方の振り返り (1人、数人での取組の反省、改善をする)
<p>教科書を google スライドでまとめる</p>	<p>ノートがわりに使用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一斉授業ではなく、自分で進めてまとめる力をつけさせたい。(受け身から自走へ)



手立て	指導の意図
<p>振り返りシート プリント版 (データ版：チェックのみ)</p> 	<p>振り返りシートをプリントでの手書きをして、目標、振り返りをさせていた。低学力層は、継続して書くことができなかったため、チェックのみの振り返りシートと二択にして自分で選んで使えるようにした。全体としては、プリントが多い傾向である。</p>
<p>教科書を google スライドでまとめる</p> 	<p>低学力層の生徒を集め、黒板前で授業。進み具合をサポートした。一斉授業ではない分、生徒の苦手な点を個別指導する時間が生み出せる。</p>

(2) 成果と課題

壮大な自習



自分で学習

(自分でまとめたが教師の
チェックが無い)

(自分でまとめ周りとの交流、
誰と学ぶか検討)

2章 植物の分類	3章 動物の分類
取組の成果	取組の成果
<ul style="list-style-type: none">・自分のペースで先へ先へ進められる生徒は、自分のペースで全員が終わるまで待つことなくどんどん進め、知識の定着・思考力の伸長を図ることができました。・自分で本時の目標を設定することで、見通しやどれだけ頑張るかを明確にして取り組むことができました。・学習意欲があまり高くない生徒でも、友だちと協力して教えてもらえながら学習に向き合うことができました。	<ul style="list-style-type: none">・選ぶことで、自分のやり切れる方法を選んで意欲が高まった生徒も見られました。・低学力層へ積極的に指導するなど一斉授業の要素も取り入れることで、知識の定着に向けた取組に効果がありました。 (一斉授業では時間が取れないが、個別に進めることで、低学力層への支援が可能に)
取組の課題	取組の課題
<ul style="list-style-type: none">・一人一人の進捗状況やまとめの内容、知識の定着度合いの確認が不十分であり、自習と変わらない取組であった生徒も見られました。(周りとの交流・学び合いの欠如)・友だちと取り組めるため楽しく学習していた反面、内容が伴わない様子が見られました。・学び方が固定され、調べ方の固定化や、友だちのまとめを丸写しなど取組が人任せになる様子が見られました。・学ぶ仲間が固定され、学びのために必要な人ではなく、仲のいい人との取組が多くなることがありました。	<ul style="list-style-type: none">・単元全部は自由進度学習や複線型の学習は難しいと感じました。時間がかかり、予定通りの進捗とならないことがあります。・自分の学びを自分で改善していく力は、引き続き指導し続ける必要があります。・目標やこの学習も「なぜに取り組むか」、「何がわかればよいか」、「なぜ学ぶのか」を明確にすることで、学習意欲を高めることが必要だと思います。・生徒自身が選択した手段や方法の妥当性の検討を常にさせていくよう働きかけが必要でした(振り返りのチェックと活用を通して)。

1 授業の実践について

2年生の数学科において、問題を解決するためのステップを生徒に委ねることができるような配慮や、学力上位層の生徒が問題解決後の時間を有効に活用することができるように工夫することの2点を意識して授業改善を行いました。授業の実際は以下の通りです。

(1) 単元について

2年生 数学科 4章「図形の調べ方」2節「図形の性質の利用」

(2) 授業の展開について

課題：いろいろな図形の角度を求めることができる

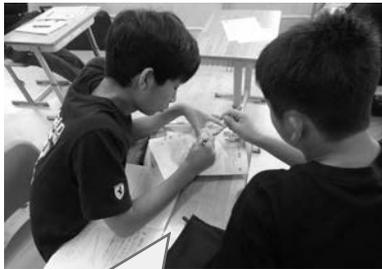
Q 下の図で、 $\angle x$ の大きさを求めなさい。

本時の課題と問題を確認した後、 $\angle x$ の大きさを求めた生徒には、「なぜそうなるのか、仲間にわかりやすい説明を考えよう」と追加で発問しました。

・授業の展開部分では、生徒たちは次のように問題解決を進めていました。



$\angle x$ の大きさを求め、仲間のためにわかりやすい説明を完成させていました。その後、発展問題として星形の図形の頂角の和を求め、その根拠の説明を考えていました。



問題を解決するための視点を仲間とともに考えた後、自力で $\angle x$ の大きさを求め、仲間にわかりやすい説明を完成させていました。



教師主導で問題を解決するための視点を共有した後、 $\angle x$ の大きさを教師や仲間とともにスモールステップで求めていました。



教師主導で問題を解決するための視点を共有した後、 $\angle x$ の大きさを教師と一緒に考えて求めました。

→
答えを求めることができうれしかったようです。



本時のまとめ：いろいろな図形の角度を求めるためには、補助線を引き、
今までに習った性質を利用して考えるとよい

生徒の声（振り返り）

- ・自分が知っている性質を駆使して正解を求めるのは楽しく、図形が好きになった。
- ・補助線を引くことが大切だとわかった。また、思っていることをうまく文章にすることが大切だと思った。
- ・図形の問題が解けてスッキリした。スライドの説明を最後に聞いて、角度の求め方を理解はしたが、説明の書き方が最後までわからなかったのが自分としては残念だった。

2 実践の成果と課題

(1) 成果

- ・終始、生徒たちが主体的に楽しそうに数学の問題に取り組む姿が見られました。
- ・協働的な学習が、問題に対する理解の深まりや、生徒同士の間関係の構築に効果があったと感じました。
- ・生徒にとって仲間にわかりやすく説明することで自己有用感が高まり、仲間の考えや説明を素直に受け止めることが寛容さにつながったと感じました。

(2) 課題

- ・課題を「いろいろな図形の角度を求めることができる」としました。学力下位層の生徒にとっては十分であったものの、中位～上位の生徒たちにとっては達成が容易でした。
→課題を選択させる工夫が必要だったかもしれません。
- ・振り返りについて、スプレッドシート等 ICT を活用する方が、生徒にとっても教師にとっても共有しやすく評価しやすいかもしれないと感じました。
※現在は振り返りシートを紙で配布し、記入後、章末に提出する形式です。数学なので複雑な公式を記入したり、図を書いたりして振り返る生徒もいるので、紙ベースで進めるか ICT を活用するか今後検討していく必要性を実感しています。
- ・今回の授業では多くの生徒がこの問題のみで終わり、他の問題演習に取り組む時間がありませんでした。学習の定着を確認するための問題演習をどのように設定するかが課題だと感じています。
- ・自分が担任している学級以外の授業で、同じように授業が進行できるか不安です。
→日頃の学級経営の土台が大きいと実感しました。集団の雰囲気や人間関係など授業者と生徒が多くの時間や価値観を共有していないと、生徒に委ねることは難しいと感じました。

伊達市立伊達小学校の実践 「理科の授業における複線化」

1 理科の授業における複線化

(1) 5年生理科 【Google formを使って調べたい実験を複線化】

①植物の発芽と成長「発芽の条件」

問題：植物が発芽するためには水のほかに何が必要だろうか。

予想：「温度」「空気」「日光」が必要

「温度」と「空気」・「温度」と「日光」・「空気」と「日光」

3つのうち、どの組み合わせを調べたいかアンケートをとってグルーピングし、実験計画から考察まで児童（グループ）自身が進めるようにしました。

②流れる水のはたらき「流れる水のはたらきが大きくなるとき」

問題：流れる水のはたらきが大きくなるのは、どのようなときだろうか。

予想：「水の量を増やす」「かたむきを大きくする」「水を流す勢いを強くする」「土を増やす」

アンケートをとってグルーピングし、実験計画から考察まで児童（グループ）自身が進めるようにしました。（一人しかいないところも、一人で実験をしました）

③物のとけ方「とけたものを取り出すには」

問題：水にとけた物は、どのようにすればとり出すことができるのだろうか。

予想：「液を冷やす」「液を蒸発させる」「液をろ過する」

アンケートをとってグルーピングし、実験計画から考察まで児童（グループ）自身が進めるようにしました。

(2) 6年生理科【考察の複線化】

①物の燃え方と空気「空気の変化」

問題：物が燃える前と物が燃えた後で、空気はどのように変わるのだろうか。

計画：気体検知管で燃える前後の空気の O_2 ・ CO_2 の割合を計測

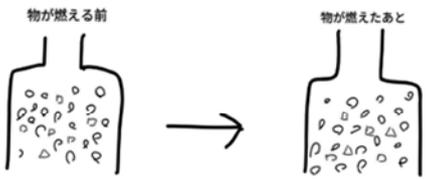
石灰水を使って燃える前後でのちがいを確認

考察：タブレット（スクールタクト）に3つの方法から選んで考察をつくる。

⇒できた考察を画面上で見合って交流

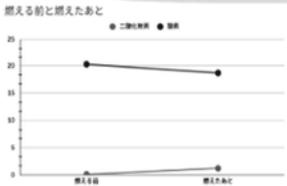
A：図・絵で考察する

B：表・グラフで考察する



物が燃えたあとの空気は、酸素の割合は減って、二酸化炭素は増えていた。酸素は物が燃えるのに使われて減って、二酸化炭素は物が燃えたことによって増えたと思う。

燃える前の空気は、ものを燃やす働きがある酸素が20%、二酸化炭素は、0.1%で、ものは燃えているけど空気が溜まって火が消えると、ものを燃やす働きがある酸素が減って、物を燃やす働きがない二酸化炭素が増えたことがわかる。物が燃えたあとの空気は、物を燃やす働きがある酸素が減って、二酸化炭素は増える。



項目	燃える前	燃えた後
酸素	20%	約18%
二酸化炭素	0.1%	約1.1%

C：説明（ストーリー）で考察する

まず石灰水の結果を見ると、白く濁っていることが分かります。白く濁っているのは、二酸化炭素が増えているということだからこの実験では、ものを燃やしたとき二酸化炭素が増えていることが分かります。次に、気体検知管の実験結果を見ると、ものを燃やした後は酸素は減っているのに二酸化炭素はとても増えていることが分かります。だから物が燃えたあとは二酸化炭素がたくさん増えていると思います。



2 実践の成果と課題

(1) 成果

5年生

- ・児童が自ら調べたい内容を選択する形とした結果、計画段階から意欲的に活動するなど、学習を「やらされているもの」ではなく、自分事として捉えている様子が見られました。
- ・他のグループの実験結果にも関心をもち、自ら他グループのテーブルを訪れて観察する姿が見られるなど、自然な形で学び合いが生まれていました。
- ・予想を立てた後にその場でアンケートを作成し、即時に回答を得る仕組みを取り入れたことにより、他者の意見に左右されることなく、自分が興味をもつ実験を選択できていました。

6年生

- ・考察は本来、結果をもとに文章で説明する必要がありますが、文章表現を苦手とする児童は考察を書かずに活動を終わってしまう傾向が見られます。そこで、本実践では「絵や図、グラフで表してもよい」という選択肢を設けました。その結果、児童は自らが描いた絵や図、グラフに対して「なぜそのように表したのか」「どこを見てほしいのか」を説明する過程で、自然と考察らしい文章表現を差し込む姿が見られました。実際に、絵や図、グラフのみを記入して活動を終えた児童はおらず、表現方法の複線化が児童一人一人の思考をことばで整理しようとする姿勢の形成につながったと考えられます。

(2) 課題

5年生

- ・時数や条件設定の関係上、児童が自らの手で実験を行うことが難しいこともありました。また、市販の単元テストが教科書に示された実験方法を前提として作成されているため、複線化した実験に取り組んだ児童の中にはテストの得点に結びつかないケースも見られました。
- ・児童によっては予想が外れる実験結果となる場合もあり、その際には、結果をどのように捉え直すかについてのフォローや支援が必要です。特に、「失敗のように見える実験にも学びの価値がある」ことを実感できるような指導上の工夫が求められます。

6年生

- ・考察の交流においては、児童一人一人が記入した考察を画面上で共有し、互いの内容を閲覧する形で行いました。そのため、相手の考えを読み取ることに終始しやすく、内容について意見を交わしたり、互いの考えを深め合ったりするような対話的な学びが生まれにくい状況でした。今後は、画面上での共有に加えて、意見の違いや共通点に着目して対話を促す仕組みを設けるなど、考察の交流をより相互的・発展的なものにしていく工夫が必要と考えます。

1 振り返りと調整を軸にした授業づくり

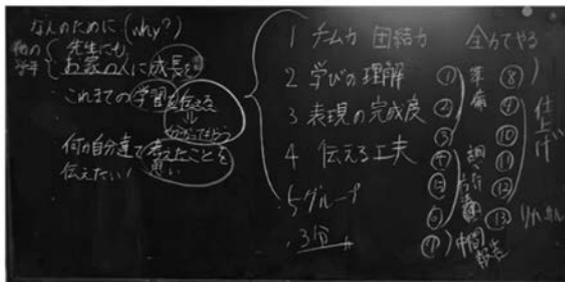
振り返りとは、今日の授業を「よかった」「できなかった」で終わらせず、そこから次につなげるための時間です。自分の学びを客観的に見つめ、「次はこうしてみよう」と考えることで、子どもたちは少しずつ自分の学び方をコントロールできるようになります。また、その中で生まれるのが「調整」です。調整とは、学び方を工夫したり、関わる相手を選んだりして、自分に合った方法を見つけていくことです。この「振り返り→調整→実践」というサイクルを繰り返すことで、子どもは“やらされる学び”から“自分で学びをつくる学び”へと変わっていくと考え、日々子どもたちと取り組んでいる具体を4つご紹介いたします。

(1) なぜ学ぶのか？

単元の最初に「この学習を通して何ができるようになるのか」「どんな力をつけたいのか」を一緒に考えます。例えば、総合的な学習の時間なら「発表会をするのはなぜだろう？」、国語なら「『ごんぎつね』を読んで、不思議に思ったことはある？」といった問いから始めると、学びが“自分ごと”になります。

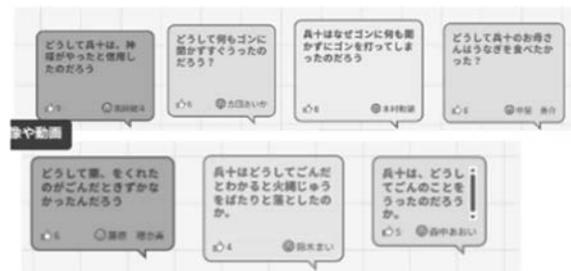
総合的な学習の時間

why：なんのために学習発表会をするのか？



国語「ごんぎつね」

why：「なぜ、ごんぎつねを読むのか」

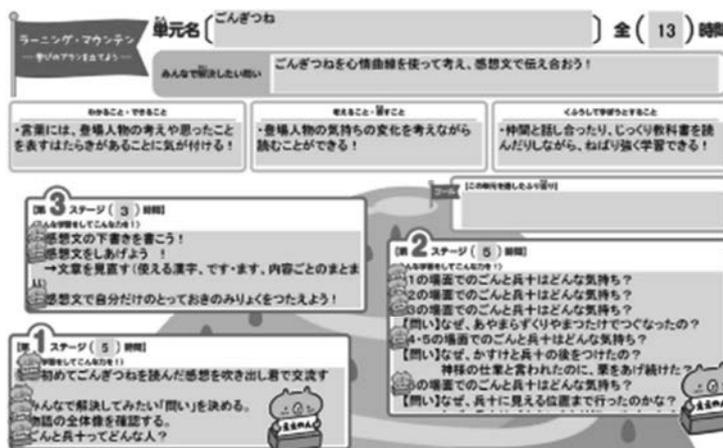


(2) ゴールから逆算して学びを見通す

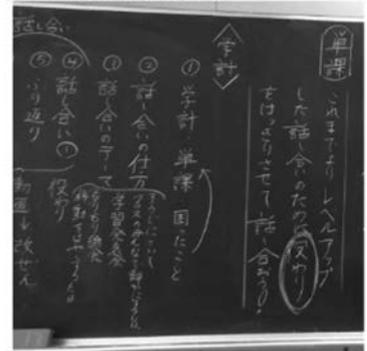
単元の終わりにどんな姿を目指すのかを共有し、そこから学習の流れを一緒に考えます。「ラーニングマウンテン」を活用して、目標までの道筋が見える形にすることで、「今自分がどこにいるのか」「次に何をすればいいのか」が分かるようにしています。

国語「ごんぎつね」

ラーニングマウンテンを活用して



国語「みんなで決めるには」にて 学習計画を子どもたちと作成



(3) 「調整した？」を合言葉に

調整とは、ただ仲の良い友達と話すことではなく、「課題を解決するために誰と、どう関わるか」を考えることです。「自分とは違う考えを持つ人に聞いてみよう」「得意な人に教えてもらおう」など、目的を意識した学び方を選べるようにします。教師が「今日はどうしてその人と学んでいるの？」と声をかけることで、子どもは自分の選び方を言葉にできるようになります。



- ・「調整する姿」を価値付ける
「質問をしてはっきりさせるいい調整だったね」
「どうして〇〇さんと調整しようと思ったの？」
「みんな手が上がったね。いい調整ができたんだね」

学習一般

why：なぜその人と学ぶのか？



(4) 振り返りを“セーブデータ”にする

毎時間の振り返りは、次の学びにつながる大切な記録です。「できたこと」「どう乗り越えたか」「次に挑戦したいこと」を書かせることで、過去・現在・未来をつなぐ学びになります。また、子どもの振り返りを読むことで、教師も授業のねらいが届いているかを確認できます。多くの子が「調整する時間がなかった」と書いていけば、授業の進め方を見直すサインととらえています。

体育「プレルボール」

単元の課題：プレルボールを「チーム」で楽しむためには？

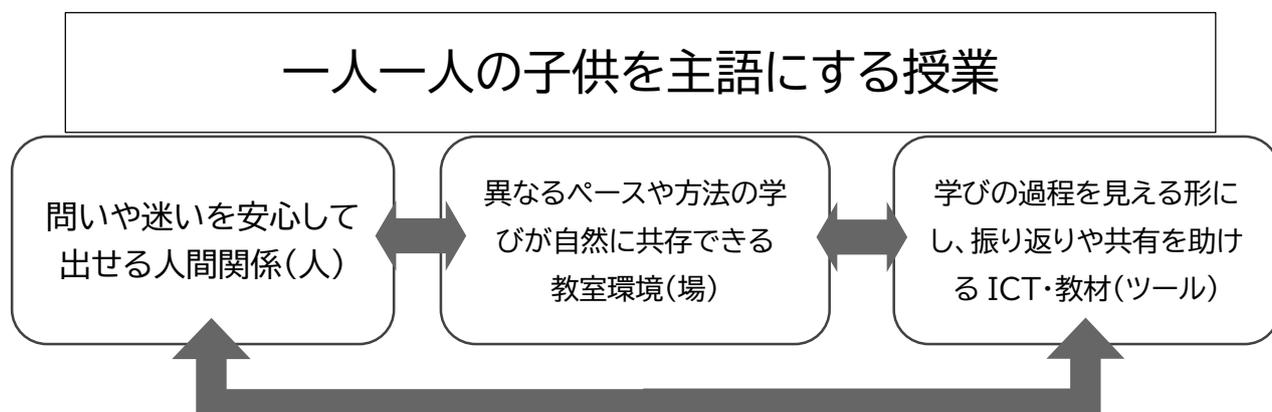
- 今日は、プレルボールを楽しくできました、なので次は、味方のとくい にかて を理解して作戦をたててみたいと思います。あと味方を前向きにする声掛けをしたいです！
- ⑤ 今日、味方を前向きにする 声掛けができなかったけど味方の 得意なことやにかてを 理解して作戦を立てれました。

2 実践の成果と課題

自分たちで学習課題を乗り越えようと自然と協働（＝調整）する姿が見られるようになってきました。また「先生、次は何をしますか？」ではなく、「先生、次は〇〇してみたい！」というように発言が変わってきたように感じます。学びを自らでかじ取りする姿が少しずつ見られるようになってきました。一方で、「誰と学ぶか」だけでなく、「どの課題から取り組むか」「どこで学ぶか」「どのくらい時間をかけるか」といった選択肢も子ども自身で選べるような環境を作り上げていくことが今後の課題です。

(2)人・場・ツールが支える学び

前段で示した3つの要素が次の図のように、相互に作用することがとても重要であると考えます。



子供一人一人が自分の学びを自分で調整し、主体的な学習者として関わろうとするとき、教室の中にどのような条件が整えられていたのかについて、整理します。

まず、伊達中学校の実践では、クエスチョンチェック表や振り返りシート、Google スライドなどを用いて、子供が自分のペースや方法を選びながら学習を進められるよう、特に「ツール」の工夫がなされていました。その結果、

- ・本時の目標を自分で設定し、どれだけ取り組むかを見通せた生徒が見られた
 - ・自分に合ったやり方を選ぶことで、学習への意欲を高めた生徒が見られた
- という成果がありました。しかし、一方で、
- ・自習と大きな違いが感じられない取組であった
 - ・丸写しや、関わる相手が固定されてしまう様子が見られた
 - ・学び方そのものが形だけになってしまう場面が見られた
- など、「人」「場」の要素において、課題も見られました。

また、伊達小学校の実践では、子供一人一人の興味や得意・不得意に応じて学び方を選べるようにし、学びの入りやすい環境づくりという「場」を広げようとする工夫が重視されていました。一方で、選んだ学びをどのように振り返り、どのように次の学習につなげていくのかについて、課題が見られました。選択肢を増やすことは重要ですが、選んだ学び方が学習のねらいとつながっているのか、子供自身が確かめていけるようにするための方策が必要です。そのためには「人」「ツール」の要素を相互に働かせていく工夫が必要です。ゴールの共有や見通し、振り返りの時間、そして教師や仲間からの問いかけがあつてこそ、「選択」は一人一人の成長につながっていくと考えられます。

そして、登別中学校の実践では、問題を解くだけでなく、「仲間に分かりやすく説明する

こと」までを学びのゴールとして委ねたことにより、

- ・図形に対して前向きな気持ちをもつようになった
- ・自分の言葉で説明することの大切さに気付いた

といった変容が見られました。「人」「場」の要素を重視したことで自己有用感の高まりも感じられました。

一方、課題の難易度の設定や時間配分の在り方、学習過程を他者参照できる工夫として紙や ICT などを選択した振り返りの方法等、主に「ツール」における記録や共有の仕組みづくりが必要であると考えられます。

さらに、東小学校の実践では、「振り返り」と「調整」を学習の中核に据え、子供が自分の学びを振り返り、次の学び方を自ら選び直していく過程が積み重ねられていたことが分かります。「調整」を、単に仲のよい友達と関わるのではなく、「課題を解決するために、誰と、どのように関わるか」を目的から考える行為として位置付けています。「調整」「セーブデータ」など共通言語を作ることで、学びの連続性を実感し、自分の学びを少しずつコントロールできるようになっている様子が見られました。「人」、「場」、振り返りを支える「ツール」の3要素が相互に働いた取組であったことが分かります。

これらは、あくまでも「一人一人の子供を主語にする授業」を目指した実践例です。だからこそ、

- ・子供に任せたからこそ見えてきた課題点
- ・主体的に取り組めた子供と、そうでなかった子供との差
- ・子供に委ねることに対する教師自身の迷いや戸惑い

がありのままに記されています。「人」「場」「ツール」のそれぞれの要素が、いずれか1つだけではなく、連動して結び付くことで、「一人一人の子供を主語にする授業」をよりよいものにし、改善していくことができると考えられます。

教師の役割は「教師主導」から「子供とともに学びを作り出す存在」へと移りつつあります。子供たちが、自ら学びを振り返り、調整し、次につなげていくことが、教室の中で少しずつ当たり前になっていく。そんな授業を目指し、試行錯誤を重ねながら形にしているのが、今回の実践であると考えます。ぜひ、自分の教室の様子を思い浮かべながら、立ち止まって考えてみるきっかけにいただければ幸いです。

Ⅲ 今後の方向性

◆今年度の研究を振り返って

今年度は、研究主題「一人一人の子供を主語にする授業づくり」の2年次として、実際に同一中学校区での取組や実践についての対談内容と、所員の所属校での実践についてまとめてきました。

今年度の成果と課題には、次の点が挙げられます。

<成果>

- 方法論や形式論ではなく、学びを支える条件（「人」・「場」・「ツール」）に議論の軸足を移すことができた。
- 同一中学校区で「学習の複線化」に取り組んでいることについて、情報を提供することができ、小中にわたる「学びの連続性」を発信できた。
- 教師の学びと調整によって、よりよい実践に育っていくことが見えた。

<課題>

- 対談や実践の中で、先生方の感じた子供の変容や手応えなどはまとめられたが、「主語になっている」姿とは何か、また、「自己調整をしている姿」をどのように見取るかなどの評価に関する観点についてはまだ整理しきれていない段階である。今後も最新情報の把握と、役立つ情報提供に努める必要がある。
- 評価方法について、具体例を提示していく必要がある。
- 「人」・「場」・「ツール」を土台とした実践について、今後も収集し、発信していく必要がある。

次年度については、この課題に対し、胆振管内の各学校での実践例を交えながら、一人一人の子供を主語にする授業づくりについて研究を深めていきます。

◆参考資料

- 中央教育審議会「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（答申）
- 学習指導要領総則・解説
- 文部科学省「生成 AI の教育利用」に関する考え方（2023～）

◆研究・執筆

役 職 名	氏 名	所 属 学 校	職 名
所 長	佐 藤 淳	伊達市立東小学校	校 長
副 所 長	横 山 康 彦	登別市立登別中学校	校 長
事 務 局 長	高 橋 賢 治	登別市立鷺別小学校	主幹教諭
事務局次長	黒 川 知 恵	白老町立白老小学校	主幹教諭
所 員	中 村 章 人	登別市立富岸小学校	教 諭
所 員	永 井 久	登別市立緑陽中学校	主幹教諭
所 員	中 島 正 義	伊達市立伊達中学校	主幹教諭
所 員	藤 井 健	伊達市立伊達小学校	主幹教諭
所 員	福 山 元 気	登別市立登別中学校	教 諭
所 員	西 島 勇 武	伊達市立東小学校	教 諭
事 務 職 員	水 留 恵美子	胆振教育研究所	

◆あしがき

この紀要をまとめている今も、私たちを取り巻く社会は、大きな転換期の中にあります。生成 AI の急速な発展に象徴されるように、「調べれば答えが出ること」や「正確に処理すること」だけでは、もはや十分とは言えない時代になってきました。文部科学省や中央教育審議会の議論においても、これからの教育には、知識そのもの以上に、それをどう使い、どう考え続けるかという力が求められていることが繰り返し示されてきました。

こうした時代背景の中で、「正解のない問題に向き合う力」が子供たちに必要だと言われるようになってきました。しかし、本理論研究の編集を通して改めて感じたのは、それは子供たちだけに求められている力ではなく、私たち教師自身にも同じように問われていることだという点です。「一人一人の子供を主語にする授業づくり」という本研究の主題も、決まった答えのない問いに向き合いながら、試行錯誤を重ねていく過程そのものだったのではないのでしょうか。

AI がどれほど進化しても、教室の中の学びは、決して予定通りには進みません。目の前の子供の姿や反応に考え、戸惑い、時には再考しながら授業をつくっていく。その積み重ねこそが、これからの時代において、ますます大切になる教師の仕事の姿なのだと思います。

「正解が分からないまま考え続けること」には、もちろん不安も伴います。しかし、それを教師自身が率先垂範で実行していくことなしに、子供たちに「考え続ける学び」を求めることはできません。本理論研究にまとめた対談や実践が、それぞれの教室での授業づくりを振り返り、次の一步を考えるための材料として生かされることを願って、あしがきとさせていただきます。

胆振教育研究所 所員 中村 章人

令和7年度 研究紀要 第247号
《研究主題》
一人一人の子供を主語にする授業づくり
～2年次～

発行年月日 令和8年3月19日
発行 胆振教育研究所
代表者 所長 佐藤 淳
印刷 (株)日光印刷

